

正法眼蔵『山水経』

Shōbō-Genzō “SANSUIKYŌ”

矢島忠夫*
Tadao YAJIMA*

要旨

本考は、『正法眼蔵』を精読する。とりわけ、論理語に留意し、道元がどのように思考していたのか、その流れが理解できるように表現することを目指す。修正可能な素案を提示することが課題である。

キーワード：青山常運歩、東山水上行、無理会話、随類の水、山流、水不流、山是山、水是水

「ものが有る」(存在する)と言うとき、わたしたちは、そのものが、たとえわずかな間でも、「それ自身と同一する」(同一である)ことを求めるだろう。それは、そのものが、変化しないこと、そのものでなくなるらないこと、「それ自身と差異しない」(異なる)ことである。

しかし、現実「ものが有る」(存在する)と言うとき、わたしたちは、そのものが、何時か何処かに、いくらかの間、いくらかの広がりをもって、そのつどの異なる状況において有る(存在する)ことを求めるだろう。それは、「もの」はつねに変化している、「それ自身と差異している」と言うことであり、その変化する状況(出来事)をも含めて、「もの」と言われる「出来事が起こっている」と言うことである。

「それ自身と同一であるものが有る」(存在する)ことが真実の在り方であるなら、なぜそれが変化できるのか、なぜそれがそれ自身と差異することができるのか、理解できないことだろう。

しかし、「それ自身と差異する出来事が起こっている」ことが真実の在り方であっても、相対的に安定した出来事を「それ自身と同一なもの」とみなして行為することが生存に有利に働くことは、理解できるだろう。

「ものが有る」(存在する)のではなく、「出来事が起こっている」のだとすれば、それ自身と差異する出来事である「行為」と別に、それ自身と同一な「行為するもの」が有る(存在する)わけもなく、「行為するもの」と「行為するものに現れるもの」は同じ「一つの

出来事」の異なる生起の仕方であることになるだろう。

『正法眼蔵』『仏性』(1241)は、「一切の衆生は悉く仏性を有する」と読まれる「一切衆生悉有仏性」を、「一切の衆生は悉有であり、悉有は仏性である、ゆえに、一切の衆生は仏性である」と読み、「仏道修行するすべてのもの(衆生)は、仏道修行するその行為において生起しているすべての出来事(悉有)と別のものである、まさにその出来事(悉有)が、仏である証し(仏性)なのである」、「仏道修行するその行為が、仏である証しなのであり、その行為のほか、仏である証しはない」と理解している。¹⁾

『山水経』は1240年、修行者たちに示されている。比較的初期の作品であるが、75巻本『正法眼蔵』では第29巻に配されている。

仏道修行者にとって、山や水は、仏道修行する行為において、それと一つの出来事として生起しているかぎり、古仏の言葉の実現(経)であると言っているようである。

1 山はつねに歩みをすすめる

[1-1-A] 而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功德を成ぜり。空劫已前の消息なるがゆゑに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆゑに、現成の透脱なり。山の諸功德高広なるをもて、乗雲の道德かならず山より通達す、順風の妙功さだめて山より透脱するなり。²⁾

[1-1-B] [仏道修行している] この今の山と水は、古仏

*弘前大学教育学部社会科教育講座
Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

の言葉の実現です。どれもその在り方のままで（法位に住して）、その力量を究め尽くし発揮しているのです。何時でもない出来事です。[仏道修行している]この今の活きた働きのなのです。誰でもない自己ですから、実現している透り脱けです。山の力量は高く広いので、雲に乗る[古仏の]言葉の力量の発揮はかならず山から通じ達するのです、風に順う[古仏の言葉の]精妙な力量の発揮は決まって山から透り脱けるのです。^{3) 4)}

[1-1-C]『正法眼蔵』は、仏道修行する修行者に向けて語りかけられる言葉（示衆）である。したがって、「而今の山水」も、仏道修行するものにとって「山」として現れ「水」として現れている出来事を指しているのだろう。

『正法眼蔵』『仏性』では、「一切衆生悉有仏性」が、「一切の衆生は、悉有であり、悉有は仏性である、ゆえに、一切衆生は仏性である」と読まれている。「仏道修行するもの（衆生）と、その行為において生起する出来事（悉有）は一つの同じ出来事であり、それ（悉有）が仏であることの証し（仏性）である」と言っているようである。

「山」や「水」は、この「仏道修行する行為においてそれと一つのこととして生起している出来事」を、したがって、また、それと一つの出来事としての、「仏道修行する行為」そのものを指すことになるだろう。

「古仏の道現成」（古仏の言葉の実現）は、「古仏の道の実現」とも理解されるが、この山も水も、「古仏の言葉の実現」として、「経」であると言うのだろう。

たとえば、[1-5-A]では、「雲門匡真大師いはく、『東山水上行』。この道現成の宗旨は」（ここに実現された言葉の大切な意味は）と言われている。『正法眼蔵』『仏道』には、「しるべし、七仏諸仏より正伝ある仏祖、かくのごとく道取するなり。ただ『吾之法門、先仏伝受』と道現成す。『吾之禪宗、先仏伝受』と道現成なし。」（おわかりでしょ。七仏諸仏から正伝がある仏祖は、このように言われるのです。ただ「わたしの法門は、先仏から伝え受けたものです」という言葉で言われたのです。「わたしの禪宗は、先仏から伝え受けたものです」などという言葉で言われたものではありません）という表現が見られる。

仏祖の言葉の力量は、「仏道修行において生起する出来事」の力量として実現しているのだから、「仏道修行する行為」の外では何ものでもない。「それ自身と同一な実体的なものでなく、それ自身と差異する出来事である」ということが、「透り脱ける」と表現されているのだろう。

「法位に住して」（その在り方に住まりながら）とは、「仏道修行する行為」や「仏道修行において生起する出来事」が、「現に生起しているそのつどの独自の仕方のみまで」と言うのだろうか。

*

[1-2-A] 大陽山楷和尚示衆云、「青山常運歩、石女夜生児」。

山はそなはるべき功德の虧闕するなし。このゆゑに常安住なり、常運歩なり。その運歩の功德、まさに審細に参学すべし。山の運歩は人の運歩のごとくなるべきがゆゑに、人間の行歩におなじくみえざればとて、山の運歩をうたがふことなかれ。

いま仏祖の説道、すでに運歩を指示す、これその根本なり。「常運歩」の示衆を究辦すべし。運歩のゆゑに常なり。青山の運歩は其疾如風よりもすみやかなれども、山中人は不覚不知なり、山中とは世界裏の花開なり。山外人は不覚不知なり、山をみる眼目あらざる人は、不覚不知、不見不聞、這箇道理なり。もし山の運歩を疑著するは、自己の運歩をもちままだらざるなり、自己の運歩なきにはあらず、自己の運歩いまだしられざるなり、あきらめざるなり。自己の運歩をしらんがごとき、まさに青山の運歩をもしるべきなり。

[1-2-B] 大陽山楷和尚は修行者に示して、「青山は常に歩みをすすめます、石女は夜に児を生むのです」と言われました。

[仏道修行する行為において生起する出来事として]山には、そなわるべきどんな力量の発揮も欠けていません。ですから、つねに安らかに住ま[れ]るのです、[さらに]つねに歩みをすすめ[られ]るのです。その歩みをすすめる力量の発揮を、まさに詳しく（修行の場で）参えて学びなさい。山は[仏道修行する]人が歩みをすすめるように歩みをすすめているはずですから、人間が[足で]歩くのと同じに見えないからといって、山が歩みをすすめることを疑ってはいけません。

いま仏祖が説く言葉は、すでに（山が）歩みをすすめることを指示していますが、これはその（山の）根本を捉えています。修行者に示された「常に歩みをすすめる」[の意味]をしっかりと究明しなさい。歩みをすすめているから常になります。青山が歩みをすすめるのは『法華経』の言う「その疾きこと風の如し」よりすみやかなのですが、山の中にいる人は、それに気づかず知りません、山の中とは[般若多羅尊者にちなめば]「世界のうちで[世界が]花開く」ことです。山の外にいる人は、それに気づかず知りません、山を見る眼がない人は、気づかず知りません、見ることも聞

くこともありません、これが道理です。もし〔修行者にとっての〕山が歩みをすすめることを疑うとすれば、〔修行者である〕自己が歩みをすすめていることをまだ知らないのです、自己が歩みをすすめていることがまだ知られていないのです、明らかになっていないのです。自己が歩みをすすめていることを知れば、まさに青山が歩みをすすめていることも知るはずです。

[1-2-C] 「山」(仏道修行する行為において生起している出来事)が「運歩する」とは、仏道修行する行為と一つの出来事として生起している「出来事」は、仏道修行する行為と別に、それ自身で固定的に存在する(自己同一的な)「もの」ではありえないことを意味するのだろう。

『正法眼蔵』『仏性』にしたがって、「仏道修行するもの(衆生)は、その行為と一つのこととして生起している出来事(悉有)(山)において、仏であること(仏性)を実証している」のだとすれば、「山がつねに運歩している」とは、「仏とはつねに仏道修行しているものである」ということであり、「自己が運歩している」とは、「修行者とは仏として行為しているものである」ということだろう。

山の中の人も、山の外の人も、気づかず知らないのは、仏道修行する行為(自己の運歩)と別に仏であることの実証(山の運歩)が起っているわけではなく、仏であることの実証(山の運歩)と別に仏道修行する行為(自己の運歩)が遂行されるわけでもないからだろう。

*

[1-3-A] 青山すでに有情にあらず、非情にあらず。自己すでに有情にあらず、非情にあらず。いま青山の運歩を疑著せんことうべからず。いく法界を量局として青山を照鑑すべしとしらず。青山の運歩および自己の運歩、あきらかに檢点すべきなり。退歩歩退、ともに檢点あるべし。

未朕兆の正当時、および空王那畔より、進歩退歩に運歩しばらくもやまざること、檢点すべし。運歩もし休することあらば、仏祖不出現なり。運歩もし窮極あらば、仏法不到今日ならん。進歩いまだやまず、退歩いまだやまず。進歩のとき退歩に乖向せず、退歩のとき進歩を乖向せず。この功德を山流とし、流山とす。

青山も運歩を参究し、東山も水上行を参学するがゆゑに、この参学は山の参学なり。山の身心をあらためず、やまの面目ながら廻途参学しきたれり。

青山は運歩不得なり、東山水上行不得なると、山を誹謗することなかれ。低下の見廻いやしきゆゑに、青山運歩の句をあやしむなり。少聞のつたなきによりて、流山の語をおどろくなり。いま流水の言も七通八達せずといへども、小見小聞に沈溺せるのみなり。

しかあれば、所積の功德を挙せるを形名とし、命脈とせり。運歩あり、流行あり。山の山児を生ずる時節あり、山の仏祖となる道理によりて、仏祖かくのごとく出現せり。

[1-3-B] 〔修行者にとっての〕青山はすでに有情でもなく、非情でもありません。〔修行者である〕自己はすでに有情でもなく、非情でもありません。〔仏道修行している〕今は青山が歩みをすすめることを疑おうとしてもできません。青山を照らしあわせて見るのに〔実体的なものである〕いくつの世界を量の区切りとしたらよいのかもわかりません。青山が歩みをすすめることと、自己が歩みをすすめること〔がどういうことか〕を、点検しあきらかにしなければなりません。後退の歩みと歩みの後退(退歩歩退)、どちらも点検しなければなりません。

どんな〔実体的〕区別の兆しもないまさにそのとき、そしてどんな〔実体的な〕ものも存在しなかったころから、前進と後退の歩みをすすめることが一時もやまなかったこと〔の意味〕を、点検しなければなりません。歩みをすすめることがもし休止することがあれば、仏祖が出現することはなかったでしょう。歩みをすすめることにもし究極があれば、仏法が今日に到ることはなかったでしょう。いまだに前進の歩みもやみません、いまだに後退の歩みもやみません。前進の歩みのときも、後退の歩みにそむくわけではありません。後退の歩みのときも、前進の歩みにそむくわけではありません。この力量の発揮を山が流れる(山流)とし、流れる山(流山)とするのです。

青山も歩みをすすめることを(修行の場で)参えて究め、東山も水の上に行くことを(修行の場で)参えて学ぶのですから、この(修行の場で)参えて学ぶことは山[自身]が(修行の場で)参えて学ぶことです。山が[自分の]身心をかえずに、自分の顔と眼(面目)のままて途をめぐらし〔進歩し退歩し〕て(修行の場で)参えて学んできたのです。

「青山は歩みをすすめることはできない、東山も水の上に行くことはできない」と〔言って〕、山を誹謗してはいけません。低級で下等の〔者の〕見るところがいやしいので、「青山が歩みをすすめる」という句をとがめるのです。〔仏祖の教えを〕聞くことが少なくつ

たないで、「流れる山」という語におどろくのです。いまだ「流れる水」と言うことにも十分通じていないに、いいかげんな見聞に沈みおぼれているだけなのです。

ですから、[修行者の] 積み重なる力量の発揮をとりあげて、[山という] 形や名とし、[運歩や流行という] 命のつなとしたのです。歩みをすすめることがあり、流れ行くことがあります。山が山の児を生む時があり、山が仏祖になるその筋道（道理）によって、仏祖がこのように出現したのです。

[1-3-C] 行為するものとその行為において生起している出来事は、一つの同じ「出来事」なのだから、自己は情のある「もの」、青山は情のない「もの」、として区別されるわけではない。

「自己の運歩」を「進歩」（修行者が仏として行為する）とすれば、「青山の運歩」は「退歩」（仏が仏道修行する）であり、それらは、異なる仕方で生起する一つの出来事であるかぎり、互いに乖くことはないと言うのだろう。

「山流」（山が流れる）や「流山」（流れる山）も、まず、山という（それ自身と同一の）「もの」が有る（存在する）ことが前提され、しかる後、流れるという（それ自身と差異する）出来事（行為）が起こることではなく、流れるという「出来事」（行為）が山という「もの」を成り立たせているということだろう。

「山が山の児を生む」も、「山は運歩する」や、「山は流れる」、「山は水上を行く」などと同様に、「仏道修行する行為において生起する出来事（仏であること）[山] は、その仏道修行する[児を生む] 行為の外では何もでもない」（仏とは仏として行為できるものにほかならない）と言うのだろう。

*

[1-4-A] たとひ草木土石 牆壁の見成せる眼睛あらんときも、疑著にあらず、動著にあらず、全現成にあらず。たとひ七宝 莊嚴なりと見取せらるる時節現成すとも、実帰にあらず。たとひ諸仏行道の境界と見現成あるも、あながちの愛処にあらず。たとひ諸仏不思議の功德と見現成の頂顛をうとも、如実これのみにあらず。各々の見成は各々の依正なり、これを仏祖の道業とするにあらず、一偶の管見なり。

転境転心は大聖の所呵なり、説心説性は仏祖の所不肯なり。見心見性は外道の活計なり、滞言滞句は解脱の道著にあらず。かくのごとくの境界を透脱せるあり、いはゆる「青山常運歩」なり、「東山水上行」なり。審細に参究すべし。

「石女夜生児」は、石女の「生児」するときを「夜」といふ。おほよそ男石女石あり。これよく天を補し、地を補す。天石あり、地石あり。俗のいふところなりといへども、人のしるところまれなるなり。生児の道理しるべし。生児のときは親子並化するか、児の親となるを生児現成と参学するのみならんや、親の児になるときを生児現成の修証なりと参学すべし、究徹すべし。

[1-4-B] たとえ[修行の力量の実証として] 草や木、土や石、牆や壁を見ることが実現する[修行者の] 目の玉があるときでも、疑うわけでも、動じるわけでもありません[が、それで] すべてが実現しているわけでもありません。たとえ七種の宝石が莊嚴されていると見て取られる時が実現するとしても、[そこが] 真実帰着すべきところなのではありません。たとえ仏たちがその道を行く境域であると見ることが実現するとしても、かならずしも愛すべきところではありません。たとえ仏たちの不可思議な力量の発揮であると見ることが実現する頂きを得るとしても、本当のところはこれだけではありません。各人が見ているのは各人に応じて現れる世界と各人（依正）です。これらを[そのまま] 仏祖の道の行い（道業）とするわけではありません、それぞれの[限られた] 立場からのぞき見られたものです。

環境を変えて[それとは実体的に別なものである] 心を変えよう（また、その逆をしよう）とすることは、大いなる聖人のお呵りになることです。[実体的なものとして] 心を説き[本] 性を説くことは、仏祖がお認めにならないことです。[実体的なものとして] 心を見[本] 性を見ることは、仏道の生き方ではありません。言や句に滞るのは[実体的なものが存在するという見方から] 解かれ脱けているもの（人）の言うことではありません。このような[実体論的な] 境域を透り脱けているもの（言葉）があります。あの「青山はつねに歩みをすすめる」がそれです、「東山は水上を行く」がそれです。詳しく丁寧（修行の場で）参えて究明しなければなりません。

「石女は夜、児を生む」とは、「石女」が「児を生む」ときを「夜」と言うのです。そもそも男の石があり女の石があるのです、男でも女でもない石もあります。[伏羲の妹がしたように] これがみごとに天のやぶれを補い、地のやぶれを補うのです。天の石があるのです、地の石があるのです。[すでに] 出家でないものが言っていることですが、知る人はほとんどいません。児を生むとはどういうことか知らなければなりません。

せん。児を生むときは、親と児がならんで教化するのでしょうか。児が親になる、それが児を生むことの実現であると（修行の場で）^{まみ}参えて学ぶだけ「[でいい]」でしょうか、親が児になるときが、児を生むことの実現を修行し「その力量」実証することだと（修行の場で）^{まみ}参えて学ばなければいけません、究め徹さなければなりません。

[1-4-C]「児が生まれる」ことが「児が親になる」（これまで児でしかなかったものが親になる）ことであるなら、「生まれる児は親と別人である」。しかし、それだけなのか、「親が児になる」ことでもあるのではないか、疑って見なさいと言うのである。「親が児になる」とは、「親自身が児として生まれる」ことだろう。

「修行者（児）が仏（親）として行為する」ときは、それと一つの出来事として（並化して）、「仏（親）が仏道修行者（児）として行為する」ときであると言うようである。

「石女」が「児を生む」ときを「夜」と言うとは、親と児の実体的な「差別のない」この同じ一つの出来事のときが「夜」と表現されていると言うのだろう。

*

[1-5-A] 雲門^{きようもん}匡真大師^{きやうしん}いはく、「東山水上行」。

この道現成の宗旨は、諸山は「東山」なり、一切の東山は「水上行」なり。このゆゑに、九山迷廬等現成せり、修証せり。これを東山といふ。しかあれども、雲門いかでか東山の皮肉骨髓、修証活計に透脱ならん。

いま現在大宋国に、杜撰^{だいそうこく}のやから一類あり、いまは群れをなせり。小実^{しょうじつ}の撃不能^{ぎやくふのう}なるところなり。かれらいはく、「いまの東山水上行^{とうさんすいじやうこうわ}話、および南泉^{なんす}の鎌子^{けんす}話のごときは、無理会話なり。その意旨は、もろもろの念慮にかかはれる語話は仏祖の禅話にあらず。無理会話、これ仏祖の語話なり。かるがゆゑに、黄蘗^{おうぼく}の行棒^{ぎやうぼう}および臨済^{りんさい}の拳喝^{こかつ}、これ理會^{りかい}およびがたく、念慮にかかはれず、これ朕兆未萌^{ちんちやうみぼう}以前の大悟とするなり。先徳^{ほうべん}の方便^{かぼう}、おほく葛藤^{かつとう}断句^{だんく}をもちあるといふは無理会なり。

かくのごとくいふやから、かつていまだ正師^{しょうし}をみず、参学^{さんがく}眼なし。いふにたらざる小馱子^{しょうがいのし}なり。宋土ちかく二三百年よりこのかた、かくのごとく魔子^{まし}・六群^{ろくぐん}禿子^{とくし}おほし。あはれれむべし、仏祖の大道^{だいたう}の廢するなり。これらが所解^{しょげ}、なほ小乘^{しょうじやう}声聞^{しょうもん}におよばず、外道^{ぐわいどう}よりもおろかなり。俗にあらず僧にあらず、人にあらず天^{てん}にあらず、学仏道^{ちくしやう}の畜生^{ちくじやう}よりもおろかなり。禿子^{とくし}がいふ無理会話、なんぢのみ無理会なり、仏祖は

しかあらず。なんぢに理會^{りかい}せられざればとて、仏祖^{りういろ}の理會路^{りかいじよ}を参学^{まみ}せざるべからず。たとひ畢竟^{ひつきやう}じて無理会なるべくは、なんぢがいまいふ理會もあたるべからず。しかのごときのたぐひ、宋朝の諸方^{しよほう}におほし。まのあたり見聞^{けんもん}せしところなり。あはれれむべし、かれら念慮の語句なることをしらず、語句の念慮を透脱^{てうたつ}することをしらず。在宋のとき、かれらをわらふに、かれら所陳^{しよちん}なし、無語^{むご}なりしのみなり。かれらがいまの無理会^{じやけ}の邪計^{じやけい}なるのみなり。たれかなんぢにをしふる、天真^{じねん}の師範^{しはん}なしといへども、自然^{じねん}の外道^{ぐわいどう}児なり。

しるべし、この「東山水上行」は仏祖の骨髓^{きやつか}なり、諸水^{しよすい}は東山の脚下^{きよせん}に現成^{けんせい}せり。このゆゑに、諸山^{しよせん}くもにのり、天をあゆむ。諸水^{しよすい}の頂顛^{ちんてん}は諸山^{しよせん}なり。向上直下^{こうじやうちよくか}の行歩^{ぎやうぶ}、ともに水上^{すいじやう}なり。諸山の脚尖^{きやくせん}よく諸水^{しよすい}を行歩^{ちゆうしつ}し、諸水を趨出^{しゆしつ}せしむるゆゑに、運歩^{うんぷ}七縱^{しちゆう}八横^{はちやう}なり、修証^{しゆじやう}即不無^{じつふむ}なり。

[1-5-B] 雲門^{きようもん}匡真大師^{きやうしん}は、「東山は水の上を行く」と言われました。

ここに実現された言葉の主旨は、[仏道修行者にとって]山々は「東山」である、すべての東山は「水の上を行く」ということです。だからこそ、九つの山や須弥山^{しゆみせん}などが実現し[得]たのです、修行し[その力量を]実証し[得]たのです。これを東山と言うのです。そうなのですが、どうして、雲門さんが、東山の真髓[である]、修行し[その力量を]実証する活動に[おいて]透り脱けている[と言えるの]でしようか。

いま現在の^{だいそうこく}大宋国に、いい加減なものたちの一派があつて、いまは群れをなしています。すこしばかり真実なものでは撃ちまかすことができません。そのものたちが言うことには、「この『東山は水の上を行く』という話や、南泉の鎌の話などは、理解できない話（無理会話）です」。その意味は、「あれこれの思念や考慮にかかわる話は仏祖の禅の話ではありません。理解できない話、それが仏祖の語る話です。ですから、黄蘗が棒を使つたり、臨済が喝を用いたりしますが、これらは理解がおよびにくく、思念や考慮にかかわらないのです、それを一切の差別が兆す以前の大いなる悟りとするのです。力量の優れた先人が使われる手段として、多く葛藤を断ち切る句を用いると言いますが、それは理解できないのです」ということです。

このように言うものたちは、これまで正しい先生にお目にかかったことがなく、（修行の場で）^{まみ}参えて学びとる眼がないのです。言うにたりないちっぽけな愚か者です。宋の地に最近二三百年来、このような魔物・[釈迦在世中のあの]六人組の[髪を短くしただけの偽]

坊主〔の類〕が多くなっています。あわれなことですが、仏祖の大なる道が廃れているのです。このものたちの理解するところは、小乗の声聞にさえおよびません、仏の道にないものよりおろかです。出家しないものでも出家でもなく、人間界のものでも天上界のものでもなく、仏の道をまなぶ鳥獸虫魚よりもおろかです。〔髪を短くしただけの偽〕坊主がいう理解できない話とは、おまえただけが理解できないのです、仏祖はそうではありません。おまえたちに理解されないからといって、仏祖が理解する路を（修行の場で）^{まみ}参えて学ばないわけにはいきません。たとえどうやっても理解できないのであれば、おまえたちがいま言っている理解も外れているはずで、このようなものたちは、宋朝のそこかしこに多くいます。この目で見聞してきたことです。あはれなこと、そのひとたちは、思念や考慮が語句であることを知らず、語句が思念や考慮を透り脱けていることを知らないのです。宋に滞在したとき、そのひとたちを笑ってみせたのですが、そのひとたちには何の意見もなく、ただ黙っているばかりでした。あのひとたちのいまの無理解がよこしまな計りごとであるだけなのです。だれがおまえたちに教えたのでしょうか、純真な師範がいなかったのでしょうか、仏道とは別（外道）の自然主義の考えにおちいった児どもなのです。

わかるでしょう、この「東山が水の上に行く」ことは、仏祖の真髓です。水たちは東山の脚もとに実現するのです。だからこそ、山々が、雲に乗り、天を歩む〔ことができる〕のです。水たちの頂きが山々なのです。上方であれ下方であれ歩み行くのは、ともに水の上なのです。山々の脚さきがみごとに水たちを歩み行き、水たちを躍り出させるのですから、歩みをすすめるのは縦横無尽なのです、修行し〔その力量を〕実証することが無いわけではないのです。

[1-5-C]「山」が「仏道修行する行為において生起する出来事」（修行の力量を実証するもの）を指すとすれば、その山はすべて、「仏道修行することができる力量を実証している」、そのかぎり、で、「東山」と呼ぶ、と言うのだろうか。

仏道のなかに禪宗などという一派をたて、理知的な理解を超える話（無理会話）にその特異性を求め、愚かにもそれを誇ろうとするものたちに対して、それは正しい指導者に仏道を学ばなかったからであり、理解できないのはその力量がないからであるとする。これが、道元の基本的立場である。

『正法眼蔵』に言う「道理」も、この視点から理解

する必要があるだろう。ふつうの意味で（それ自身と同一の実体的なものとして）「山が水の上に行く」ことが理解できないなら、これをそれとは異なる仕方（それ自身と差異する出来事として）理解できる路を探すことが求められるわけである。

「山」が、「仏道修行する行為において生起する出来事」（修行者が仏として在ること）を意味するなら、「水の上に行く」ことは、それと一つの出来事である（仏が）「仏道修行する行為」を意味するだろう。

「思念や考慮が語句である、語句が思念や考慮を透り脱けている」とは、「仏道における〔それ自身と同一の実体的なものの存在を前提しない〕理解が仏祖の言葉となって表現されているのであり、その言葉は仏道から外れた〔それ自身と同一の実体的なものの存在を前提する〕理解を透り脱けている」というのだろうか。

「自然の外道」とは、「思念や考慮（理解）を離れさえすれば自然に仏になれる」という「自然主義」で、そんな理解は「仏道から外れている」ということだろう。

「修証即不無」とは、「修行があり、その力量を実証すること（その違い）がある」にしても、それらは、「まず修行があり、しかる後に実証がある」というように、別々の「もの」として存在するわけではなく、異なる仕方（捉えられた同じ一つの「出来事」として）ある、ということだろう。それを、「水たち（修行）は東山の脚もとに実現（実証）する」と言い、「水たち（修行）の頂き（実証）が山々なのだ」と言うようである。

2 龍魚は水を宮殿と見る

[2-1-A] 水は強弱こうにやくにあらず、湿乾しつかんにあらず、動靜どうじょうにあらず、冷煖りょうなんにあらず、有無いうむにあらず、迷悟めいごにあらざるなり。こりては金剛こんごうよりもかたし、たれかこれをやぶらん。融にゆうじては乳水にゅうすいよりもやはらかなり、たれかこれをやぶらん。しかあればすなはち、現成所有げんじょうしよゆうの功德こんとくをあやしむことあたはず。しばらく十方じふぱうの水を十方じふぱうにして著眼じやくけん看すべき時節じふぱうを参学さんがくすべし。人天にんでんの水をみるときのみの参学さんがくにあらず、水の水をみる参学さんがくあり、水の水を修証しゆじうするゆゑに。水の水を道著どうじやする参学さんがくあり、自己じこの自己じこに相逢そうぶする通路どうろを現成げんじやうせしむべし。他己たごの他己たごを参徹さんてつする活路かつろを進退しんたいすべし、跳出ちゆうしゆつすべし。

おほよそ山水をみること、種類にしたがひて不同あり。いはゆる水をみるに瓔珞ようらくとみるものあり。しかあれども瓔珞を水とみるにはあらず。われらがなにとみ

るかたちを、かれが水とすらん。かれが瓔珞はわれ水とみる。水を妙華とみるあり。しかあれど、花を水ともちみるにあらず。鬼は水をもて猛火とみる、膿血とみる。龍魚は宮殿とみる、楼台とみる。あるいは七宝摩尼珠とみる、あるいは樹林牆壁とみる、あるいは清浄解脱の法性とみる、あるいは真実人体とみる。あるいは身相心性とみる。人間これを水とみる、殺活の因縁なり。すでに随類の所見不同なり、しばらくこれを疑著すべし。一境をみるに諸見しなじななりとやせん、諸象を一境なりと誤錯せりとやせん、功夫の頂顛にさらに功夫すべし。しかあればすなはち、修証辦道も一般兩般なるべからず、究竟の境界も千種万般なるべきなり。さらにこの宗旨を憶想するに、諸類の水たとひおほしといへども、本水なきがごとし、諸類の水なきがごとし。しかあれども、随類の諸水、それ心によらず身によらず、業より生ぜず、依自にあらず依他にあらず、依水の透脱あり。

しかあれば、水は地水火風空識等にあらず、水は青黄赤白黒等にあらず、色声香味触法等にあらざれども、地水火風空識等の水、おのずから現成せり。かくのごとくなれば、而今の国土宮殿、なにももの能成所成とあきらめいはんことかたかるべし。空輪・風輪にかかると道著する、わがまことにあらず、他のまことにあらず。小見の測度を擬議するなり。かかるところなくは住すべからずとおもふによりて、この道著するなり。

[2-1-B] 水は強でも弱でもありません、湿でも乾でもありません、動でも静でもありません、冷でも暖でもありません、有でも無でもありません、迷でも悟でもありません。凝結すれば金剛よりも剛く、誰もそれを破れません。融解すれば乳水より柔らかく、誰もそれを破れません。ですからつまり、[水が] 実現し所有する力量の發揮をあやしむことはできません。[ここで] しばらく、諸方の水を[その] 諸方の眼で見るべき時[のこ]を(修行の場で)参えて学ばなければなりません。人間界のものや天上界のものが水を見るときだけを(修行の場で)参えて学ぶではありません。水が水を見ることを(修行の場で)参えて学ぶことがあります、なぜなら水[と]は水[の行い]を修得し[その力量を] 実証する[ものだ]からです。水が水を言い表すことを(修行の場で)参えて学ぶことがあります、自己が自己に出逢う通路を実現させなければなりません。他己が他己に(修行の場で)参え徹す活路を進み退かなければなりません、跳び出なければなりません。

そもそも山や水を見ることは、種類にしたがって違いがあります。いわゆる水を玉飾りと見るものたちがありますが、だからといって[わたしたちの]玉飾りを水と見ているわけではありません。そのものたちはわたしたちが何だと思っている現象を水としているのでしょうか。そのものたちが玉飾りと見ているものをわたしたちは水と見ているのです。水をきれいな華と見るものたちがあります。だからといって、[わたしたちの]花を水としてもちいるわけではありません。鬼は水を猛火と見ます、膿や血と見ます。龍や魚は宮殿と見ます、楼台と見ます。あるいは七種の宝石や珠玉と見ます、あるいは樹や林や牆や壁と見ます、あるいは清浄で[実体的な在り方を]解かれ脱した在り方(法性)と見ます、あるいは真実の人の体と見ます。あるいは身体の在り方、心の本性(身相心性)と見ます。それを人間は水と見ているのです。このようにして、[水は]活かされもし殺されもするわけ(因縁)です。すでに類にしたがって見るものが違っているのです[が]、しばらくこれ[はどういうことなのか]を疑ってみなければなりません。一つの対象的なもの(境)[が]まず存在していて、それを見るその仕方がさまざまであるとしましょうか、あれこれの現象(象)[が]起こっていて、それ[を]一つの対象的なもの[の存在]と誤って取り違えているのだとしましょうか。力を尽くして検討し、その頂きでさらに力を尽くして検討しなければなりません。ですからつまり、修行し実証して仏道にはげむことも一つ二つのやり方であるわけもなく、究極の境界も千差万別であるはずで。さらにこの[随類の水の]主旨に思いを凝らしてみれば、それぞれの類の水が多いと言われても、もとになる[実体的に存在する一つの]水があるのではないようです、それぞれの類[ごと]に[実体的に存在する]水があるわけではないようです。と言っても、類にしたがう水たちが、[実体的な]心に依って[存在するの]でも[実体的な]身体に依って[存在するの]でも、[実体的な原因となる]行為に依って生じるのでもありません、[実体的な]自己に依って[存在するの]でも[実体的な]他のものに依って[存在するの]でもありません、水[自身]に依って[実現するわけですから][実体的な在り方は]透り脱けられているのです。

ですから、水は、地水火風空識など[実体的に存在するもの]ではありません、水は青黄赤白黒など[実体的なものの性質]ではありません、色声香味触法など[対象的に捉えられもの]ではありませんが、地水火風空識など[出来事として]の水が、おのずから実現してい

るのです。こういうことですから、(仏道修行している) 只今の国土も宮殿も、だれが実現したのか誰に実現させられたのか明らかに言うことはむずかしいはずです。『俱舍論』にしたがって] 空輪や風輪に依りかかっているとんでも、わたしにとっても真実ではなく、他の人にとっても真実ではないのです。狭量な見解の推し測りをあてはめているのです。[実体的な] 依りかかるところがなくは住まることができないと思うので、そんなふうにするのです。

[2-1-C] 「水が水を修証する」とは、「水が水としての活動を修得しその本領(力量)を発揮する(実証する)」ことを意味するのだろう。

「水と、水の活動と、その活動において実現している出来事とが、一つの同じ出来事(水)である」ことが、したがって、「修行とその実証が、一つの同じ出来事である」ことが、「水が水を見る」、「水が水を言い表す」、「自己が自己に逢う」などと表現されているのだろう。

類にしたがって見るところが違ふと聞くと、まずは見られるものが同一のものとして客観的に存在し、それを見る主観的な仕方が違ふだけだと理解されがちである。それを、「疑って見なさい」と言うのだろうか。見るものの行為から独立に、それ自身と同一な「もの」(境)が存在するのではなく、見る行為と一つのこととして生起しているさまざまな「出来事」(象)が一つの実体的な「もの」(境)と取り違えられていると言うようである。

見られるものが実体的に存在するわけではないと言っても(しかあれども)、見るもの(心、身、業、自、他)がそれとは別の実体的なものとして存在し、見られるものがそれに「依存して」存在すると言うわけでもない。見るもの自身も、見る行為において生起(実現)している出来事(見られるもの)と一つの出来事として生起しているものであり、だからこそ、見られるもの(水)の実体的な存在も、見るものの行為(水の活動)と一つの出来事として(水に依って)、「透り脱けられている」と言うのだろうか。

*

[2-2-A] 仏言、「一切諸法畢竟解脱、無有所住」。

しるべし、解脱にして繫縛なしといへども諸法住位せり。しかあるに、人間の水をみるに、流注とどまらざるとみる一途あり。その流に多般あり、これ人見の一端なり。いはゆる地を流通し、空を流通し、上方に流通し、下方に流通す。一曲にもながれ、九淵にもながる。のぼりて雲をなし、くだりてふちをなす。

[2-2-B] 仏(目覚めた方)は、「[現に]存在するすべてのものはそもそも[実体的な繫縛を]解かれ脱して、[実体的なものとしては]住まるところがない」と言われました。

おわかりでしょう、「実体的な在り方を」解かれ脱して、繫ぎ縛られていないと言うのですが、「現に」存在するすべてのものはどれもそれ自身の「独自の」在り方に住まっているのです。そうなのですが、人間が水を見るとき、一途に、流れ注いで住まらないと見るものがあります。[しかし]その流れにはさまざまな仕方があります。[だから]この(一途な)見方は人間の見方[でもそ]の一端にすぎません。[水は]いわゆる地を流れ通り、空を流れ通り、上方に流れ通り、下方に流れ通ります。曲がりくねっても流れ、淵にただよっても流れます。上っては雲をなし、下っては淵をなすのです。

[2-2-C] 「諸法住位せり」(現に存在するすべてのものはそれぞれの存在の位に住まる)とは、現に(仏道修行するものにとって)存在するすべてのものは「畢竟」(その真実の在り方においては)実体的に差別のある(繫縛されている)ものとして存在するわけではない(解かれ脱している)、しかし、まったく無差別であるのでもなく、それぞれ独自の出来事として生起している(独自の力量を発揮している)(その出来事に住んでいる、その出来事を住処としている)と言うのだろう。

*

[2-3-A] 文子曰、「水之道、上天為雨露、下地為江河」。

いま俗のいふところ、なほかくのごとし。仏祖の児孫と称せんともがら、俗よりもくからんは、もともはずべし。いはく、水のみちは水の所知覚にあらざれども、水よく現行す。水の不知覚にあらざれども、水よく現行するなり。

「上天為雨露」といふ、しるべし、水はいくそぼくの上天上方へものぼりて雨露をなすなり。雨露は世界にしたがうてしなじなり。水のいたらざるところあるといふは小乗声聞教なり、あるいは外道の邪教なり。水は火焰裏にもいたるなり、心念思量分別裏にもいたるなり、覚智仏性裏にもいたるなり。

「下地為江河」。しるべし、水の「下地」するとき、「江河」をなすなり。江河の精よく賢人となる。いま凡愚庸流のおもはくは、水はかならず江河海川にあるとおもへり。しかにはあらず、水のなかに江海をなせり。しかあれば、江海ならぬところにも水はあり、水の下地するとき、江海の功をなすのみなり。

また、水の江海をなすつるところなれば世界あるべからず、仏土あるべからずと学すべからず、一滴のなかにも無量の仏国土現成なり。しかあれば、仏土のなかに水あるにあらず、水裏に仏土あるにあらず。水の所在、すでに三際にかかはれず、法界にかかはれず。しかもかくのごとくなりといへども、水現成の公案なり。

仏祖のいたるところには水かならずいたる。水のいたるところ、仏祖かならず現成するなり。これによりて、仏祖かならず水を拈じて身心とし、思量とせり。

しかあればすなはち、水はかみにのぼらずといふは、内外の典籍にあらず。「水之道」は上下縦横に通達するなり。しかあるに、仏経のなかに、「火風は上にのぼり、地水は下にくる」。この上下は、参学するところあり、いはゆる仏道の上下を参学するなり。いはゆる地水のゆくところを下とするなり。下を地水のゆくところとするにあらず。火風のゆくところは上なり。世界かならずしも上下四維の量にかかはるべからざれども、四大・五大・六大等の行処によりて、しばらく方隅法界を建立するのみなり。無想天はかみ、阿鼻獄はしもとせるにはあらず。阿鼻も尽法界なり、無想も尽法界なり。

しかあるに、龍魚の水を宮殿とみるとき、ひとの宮殿をみるがごとくなるべし、さらにながれゆくど知見すべからず。もし傍観ありて、なんぢが宮殿は流水なりと為説せんときは、われらがいま山流の道著を聞著するがごとく、龍魚たちまちに驚疑すべきなり。さらに宮殿楼閣の欄階露柱は、かくのごとくの説著あると保任することもあらん。この料理、しずかにおもひきたりて、おもひもてゆくべし。この辺表に透脱を学せざれば、凡夫の身心を解脱せるにあらず、仏祖の国土を究尽せるにあらず、凡夫の宮殿を究尽せるにあらず。

[2-3-B]『文字』の言うには、「水の道は、天に上つて雨や露となる、地に下つて江や河をなす」です。

いま出家でないものが言うことでも、すでにこのようです。仏祖の子孫であると自称するものたちが、出家でないものより暗ければ、もっとも恥じなくてはなりません。すなはち、水の道は水が[対象意識的に]知覚するところでもなく、水はみごとにその働きを実現するのです。水が知覚しないわけでもなく、水はみごとにその働きを実現するのです。

「天に上つて雨や露となる」と言われています。おわかりになるはずですが、水はどれほどの上天上方にも上つて雨や露をなすのです。雨や露は世界にしたがつ

てさまざまです。水が到らないところがあると言うのは小乗の声聞の教えです、あるいは仏道から外れたゆがんだ教えです。[大乘の教える水は]火焰のなかにも到るのです、心念や思量や分別のなかにも到るのです、仏である証しを覚智するなかにも到るのです。

「地に下つて江や河をなす」。おわかりになるはずですが、水が「地に下る」[行為する]とき、「江や河」をなす[出来事が生起する]のです。江や河を住処とする[に住位する]もの(精)が賢人になることができるのです。いま凡庸で愚かなものがあることですが、水はかならず江や河、海や川にあるものだと思われています。そうではないのです、水[が下る行為]のなかに江や海[出来事]が成りたつのです。ですから、江や海でないところにも水があるのです、水が地に下るとき、江や海の力量を発揮するだけなのです。

また、水が江や海をなしているところだから世界はあるはずがない、仏の国土はあるはずがないと学んではいけません、一滴(水)(仏道修行する行為)のなかにも無限の仏の国土が[出来事として]実現[生起]しているのです。ですから、仏の国土[実体的なもの]のなかに水[実体的なもの]があるのではありません、[実体的な]水のなかに[実体的な]仏の国土があるのではありません。水があるところは、すでに過去現在未来の[実体的な]区別にかかわりません、[実体的に]存在するもの世界にかかわりません。しかし、それでもやはり、水は実現している真実(現成の公案)なのです。

仏祖が到るところはかならず水が到るのです。水が到るところは、仏祖がかならず実現するのです。ですから、仏祖はかならず水をもって[自己の]身心とし、[自己の]思量とするのです。

ですからつまり、水は上に上らないと言うことは、仏教の経典にも仏教以外の書籍にも見られないのです。「水の道」は上下縦横に通じ達するのです。ところが、仏の経のなかに、「火や風は上に上り、地や水は下に下る」[とされています]。この上と下については、(修行の場で)参えて学ばなければいけないことがあります。いわゆる仏の道の上と下を(修行の場で)参えて学ぶのです。いわゆる地や水が行くところを下とするのです。下を地や水の行くところとするのではありません。存在するもの世界はかならずしも上下や東西南北の区別にかかわるわけではありませんが、[地水火風空識などの]四大や五大、六大などの行くところによって、とりあえず方位や存在するもの世界を成り立たせているだけなのです。無想の天が上方、阿鼻地獄が下方とするわけではないのです。阿鼻地獄

も、[五逆罪を犯すものには] 存在するものの世界の全体なのです、無想天も、[無想定を修めるものには] 存在するものの世界の全体なのです。

ところで、龍や魚が水を宮殿と見るときは、人が宮殿を見るようであるはずで、さらに流れゆく知り見るはずがありません。もし傍観者がいて、あなたの宮殿は流れる水ですと言ってやるときは、わたしたちが今山が流れると言われるのを聞くようなもので、龍や魚はすぐに驚き疑うはずで、さらに宮殿や楼閣の欄干やきざし、露きだしの柱が、このように説かれることがあると了解することもあるでしょう。このような理解の仕方を、しづかに繰り返して考え抜くのでなければなりません。このあたりで[実体的な理解の仕方]を透り脱けることを学ばないようでは、凡庸な人の身心から解かれ脱していることになりません、仏祖の国土を究明し尽くしていることになりません。凡庸な人の国土を究明し尽くしたことに[も]なりません、凡庸な人の宮殿を究明し尽くしたことに[も]なりません。

[2-3-C] この「公案」(真実)は、「仏道修行する行為(水)において生起している出来事」としての「仏国土」「仏祖」等(仏であることの実証)を指すのだろう。

小乗の声聞が教える水と対比されるのは、大乘の菩薩が教える水である。大乘の菩薩の真骨頂が、「自未得度先度他」(すべての人を彼岸に渡すまでは自らは決して彼岸に渡るまい)の誓願にあるとすれば、仏道修行することをやめない仏、仏であることを実証する行為としての修行が、仏道における「水」として語られているのだろう。

「水の行くところを下とするのであって、下を水の行くところとするのではない」とは、「仏道修行において実現されている出来事そのものを仏とするのであって、[修行と独立に先在しない後続する実体的な]仏を目指して仏道修行が行われるのではない」ことを意味するのだろう。

「行為において生起する出来事を存在するものとしているのであって、行為が働きかけるものがあらかじめ行為と独立に[実体的に]存在しているわけではない」という意味で、これは、すでに、凡夫の国土や宮殿についても真理である、そのことを理解しなさい、と言うようである。

*

[2-4-A] いま人間には、海のこころ、江のこころを、ふかく水と知見せりといへども、龍魚等、いかなるものをもて水と知見し、水と使用すといまだしらず、お

ろかにわが水と知見するを、いずれのたぐひも水にもちあるらんと認ずることなかれ。いま学仏のともがら、水をならはんとし、ひとすぢに人間のみにはとどこほるべからず。すすみて仏道のみづを参学すべし。仏祖のもちあるところの水は、われこれをなにか所見すると参学すべきなり、仏祖の屋裏また水ありや水なしやと参学すべきなり。

[2-4-B] 今、人間界では、海のいのち、江のいのちは、水であると深く思い見知っているのですが、龍や魚などは、どういうものを水として見知り、水として使い用いているのかいまだに知りません。おろかにも自分が水として見知っているものを、どの類も水として用いているだろうと認めてはいけません。今仏を学んでいるみなさん、水をならおうとするときは、一筋に人間界だけに滞ってはいけません。すすんで仏道の水を(修行の場で)参えて学ばなければいけません。仏祖が用いる水を、自分は何として見ているのかを(修行の場で)参えて学ばなければいけません。仏祖の家のうちにはたして水があるのか水がないのかと(修行の場で)参えて学ばなければいけません。

[2-4-C] 仏(目覚めたひと)の道において水と見られるものは、人間界の何に相当するのか、かりにそれが、「修行」という言葉で表現されたとしても、それは、わたしたちにとって対象的なものとして現れる水と同じような仕方で、仏祖にとって現れているのか、考えてみなさい、と言うのだろう。

3 山に住み、水に住む

[3-1-A] 山は超古超今より大聖の所居なり。賢人聖人、ともに山を堂奥とせり、山を身心とせり。賢人聖人によりて山は現成せるなり。おほよそ山は、いくそばくの大聖大賢いりあつまれるらんとおぼゆれども、山はいりぬるよりこのかたは、一人にあふ一人もなきなり。ただ山の活計の現成するのみなり、さらにいきたりつる蹤跡なほのこらず。世間にて山をのぞむ時節と、山中にて山にあふ時節と、頂顚眼睛はるかにことなり。不流の憶想および不流の知見も、龍魚の知見と一齊なるべからず。人天の自界にところをうる、他類これを疑著し、あるいは疑著におよばず。しかあれば、山流の句を仏祖に学すべし、驚疑にまかすべからず。拈一はこれ流なり、拈一これ不流なり。一回は流なり、一回は不流なり。この参究なきがごときは、如来正法輪にあらず。

古仏いはく、「欲得不招無間業、莫謗如来正法輪」。

この道^{どう}を、皮肉骨髓に銘^{めい}ずべし、身心^{しんじん}依正^{えせい}に銘^{めい}ずべし。空^{くう}に銘^{めい}ずべし、色^{しき}に銘^{めい}ずべし。若^{にやく}樹^{じゆ}若^{にやく}石^{せき}に銘^{めい}ぜり、若^{にやく}田^{でん}若^{にやく}里^りに銘^{めい}ぜり。

[3-1-B] 山は古今を超えて偉大な聖人の居られるところ。賢人も聖人も、ともに山を奥深い住まいとされ、山を身心とされました。賢人や聖人によって山は実現するのです。およそ山は、どれほど多くの偉大な聖人や賢人が入れ集まっておられるかと思われませんが、山に入ってしまうと、誰一人としてお会いすることがありません。ただ山の働きが実現するだけで、入って来た痕跡がまだ残っているなどということにはけしてありません。世間で山を望み見ている時と、山の中で山に会う時では、[その相貌は] 頂きも眼の玉もすっかり違っています。[山が] 流れないという考えも、[山が] 流れないという知見も、龍や魚の知見とひとしいはずがありません。人間界や天上界のものが自分の世界において是認していることを、他の類のものは疑います、あるいは疑いさえしません。ですから、[仏道修行者は] 山が流れるという言葉は仏祖に学ばなければなりません、驚き疑うにまかせてはいけません。一方では流れるとし、もう一方では流れないとするのです。ある時は流れ、ある時は流れないのです。このことを(修行の場で) 参^{まみ}えて究明しなければ、如来の正しい法を説くことにならないのです。

古仏は、「無間地獄におちる行為(五逆罪)を招きたくないと思うなら、如来が説く正しい法^{そし}を謗^{ぼう}ってはなりません」と言われました。

この言葉を、[仏道修行者の] 皮肉骨髓に刻みつけなければいけません、身体とところに、自分をとりまくものと自分自身に刻みつけなければいけません。空(形のないもの)に刻みつけなければいけません、色(形のあるもの)に刻みつけなければいけません。《涅槃経》にならえば 樹にも石にも刻みつけるのです、《法華経》にならえば 田にも里にも刻みつけるのです。

[3-1-C] およそ、行為するものが住まう(住位する)ところは、行為においてそれと一つのこととして生起する出来事の外にはありえない。

だとすれば、仏道修行するものが住まうところも、仏道修行する行為においてそれと一つのこととして生起する出来事(仏であることの実証)の外にはありえないだろう。

かりに、この出来事が、「山」と呼ばれ、確固たる出来事として「流れない」と言われようと、それは、仏道修行する行為と一つの出来事として、「流れる」と言われるのだろう。

*

[3-2-A] おほよそ山は国界に属せりといへども、山を愛する人に属するなり。山かならず主を愛するとき、聖賢高德やまに在るなり。聖賢やまにすむとき、やまこれに属するがゆゑに、樹石^{うつせき}鬱茂^{うつも}なり、禽獸^{きんじゆう}靈^{れい}秀^{しゆう}なり。これ聖賢の徳をかうぶらしむるゆゑなり。しるべし、山は賢をこのむ実あり、聖をこのむ実あり。

帝^{てい}者^{じや}おほく山に幸^{こう}して賢人を拜^{だい}し、大^{だい}聖^{しょう}を拜^{はい}問^{もん}するは、古今の勝^{しょう}躪^{ちよく}なり。このとき、師^し礼^{らい}をもてうやまふ、民間の法に準^{じゆん}ずることなし。聖化のおよぶところ、またく山賢を強^{かう}為^いすることなし。山の人間をはなれたること、しりぬべし。崆峒^{かうとう}華封^{わほう}のそのかみ、黄^{わう}帝^{てい}これ^{これ}を拜^{はい}請^{しょう}するに、膝^{しつ}行^{こう}して叩^{こう}頭^{とう}して広^{かう}成^{せい}にとふしなり。釈^{しやく}迦^か牟^む尼^に仏^{ぶつ}か^かつて父^ふ王^{おう}の宮^{みやう}をいでて山にいれり。しかあれども、父王やまをうらみず、父王やまにありて太子^{たいし}ををしふるともがらをややまず。十二年の修^{しゆ}道^{どう}、おほく山にあり。法^{ほう}王^{わう}の運^{うん}啓^{けい}も在^{ざい}山^{さん}なり。まことに輪^{りん}王^{わう}なほ山を強^{かう}為^いせず。しるべし、山は人間のさかひにあらず、上天のさかひにあらず、人^{にん}慮^{りよ}の測^{しき}度^{たく}をもて山を知見^{ひじけん}すべからず。もし人間の流に比^ひ準^{じゆん}せずは、たれか山流山不流等を疑^ぎ著^{しやく}せん。

[3-2-B] およそ山は国の領界に属すると言われますが、山を愛する人に属するのです。山はかならずその主^{あるじ}を愛するのですが、そのとき、聖人や賢人や高德の人が山に入るので。聖人や賢人が山に住むとき、山はこの人に属するので、樹や石が鬱蒼と繁茂するので、鳥や獣が靈^{れい}秀^{しゆう}でているのです。これは聖人や賢人の力量をこうむらせるからです。おわかりでしょう、山は賢人をこのむ[ところにその] 真実があり、聖人をこのむ[ところにその] 真実があるのです。

帝王が多く山に行^み幸^{ゆき}され賢人に拜^{はい}礼^{らい}し、偉大な聖人に拜^{はい}問^{もん}されるのは、古今のすぐれた事蹟です。このとき、先生に対する礼をもって敬^{かう}うのです、俗界の作法にならうことはありません。聖人の教化がおよぶところでは、山が賢人に無理を強いることはまったくありません。[この] 山が人間界を離れていることがわかるはず。崆峒山[の広成子] や華の封官のその昔、黄帝はこの方(広成子)を拜^{はい}し教^{きやう}を請^{しょう}うにあたって、膝をつけて進退し頭を地につけてお辞儀をして[広成子に] 問われたのです。釈迦牟尼仏はかつて父王の宮殿を出て山に入られました。けれども、父王は山を恨みませんでした、山にあつて太子を教えられたものたちをとがめませんでした。道を修める十二年の多くは、山ですごされました。法の王としてお出ましにな

られたのも山にあってです。ほんとうです、転輪聖王〔世界の支配者〕でさえ山に無理を強いることはないのです。おわかりでしょう、山は人間界の境域ではありません、上天界の境域でもありません、人の思慮で押し測ることをもって山を見たり、知ったりしてはいけません。もし人間界の流れに比べ^{なぞら}準えたりしなければ、誰が、山が流れ〔かつ〕山が流れない、などのことを疑うでしょうか。

[3-2-C] 聖人や賢人が主人でありそれが愛する「山」、賢人や聖人をこのむところに真実がある「山」とは、聖人や賢人の行為と一つのこととして生起する出来事としての「山」だろう。

「山に住む」と言っても、人間界の山に^{なぞら}準えてはいけない、釈迦牟尼仏は、道を修めるその行為と一つのこととして生起している出来事（山）に住んでいるのである、仏と成られ、法の王となられても、道を修めるその行為（山）の外に出るわけではないのである、「山が流れる」ことも「山が流れない」ことも、この同じ一つの出来事が〔仏道修行とその実証という〕異なる視点から見られているだけなのだから、驚くにはあたらない、と言うのだろう。

*

[3-3-A] あるいはむかしよりの賢人聖人、ままた水にすむもあり。水にすむとき、魚をつるあり、人をつるあり、道をつるあり。これともに古来水中の風流^{ふうりゅう}なり。さらにすすみて自己をつるあるべし、釣をつるあるべし、釣につらるるあるべし、道につらるるあるべし。

むかし^{とくじょう おしやう}徳誠和尚、たちまち^{やくさん}薬山をはなれて江心にすみしすなはち、華亭江^{かていこう}の賢聖^{けんじやう}をえたるなり。魚をつらざらんや、ひとをつらざらんや、水をつらざらんや、みずからをつらざらんや。人の徳誠をみることをうは、徳誠なり。徳誠の人を接するは、人にあふなり。

世界に水ありといふのみにあらず、水界に世界あり。水中のかくのごとくあるのみにあらず、雲中にも有情世界あり、風中にも有情世界あり、水中にも有情世界あり、地中にも有情世界あり。法界中にも有情世界あり、一茎草中にも有情世界あり、一拄杖中にも有情世界あり。有情世界あるがごときは、そのところかならず仏祖世界あり。かくのごとくの道理、よくよく参学すべし。

しかあれば、水はこれ真龍の宮なり、流落^{るらく}にあらず。流のみなりと認ずるは、流のことは、水を誘^{ほう}ずるなり。たとへば非流と強為するがゆゑに。水は水の如

^{ぜじつそう}是実相のみなり、^{すいぜすいくどく}水是水功德なり、流にあらず。一水の流を参究し、不流を参究するに、万法の究尽たちまち現成するなり。

[3-3-B] あるいは、昔から賢人や聖人で、ときには水に住むかたがおられました。水に住むとき、魚を釣るかたもおられます、人を釣るかたもおられます、道を釣るかたもおられます。これはどれも古来水の中に住む流儀なのです。さらにすすんで自分を釣るかたもおられるはずで、釣りを釣るかたもおられるはずで、釣りに釣られるかたもおられるはずで、道に釣られるかたもおられるはずで。

むかし、〔船子〕徳誠和尚はにわか薬山〔惟儼〕さんのもとを離れられ〔渡し守として〕大きな川のなかに住まわれましたが、そこで、華亭江の賢聖〔夾山善会〕を得ることができました。〔水に住むものは〕魚を釣らないでしょうか、人を釣らないでしょうか、水を釣らないでしょうか、自らを釣らないでしょうか。人が徳誠^{まみ}に見えることができるのは、〔そのひとが〕徳誠〔だから〕なのです。徳誠が人を応接できるのは、〔しかるべき〕人（徳誠）に出会っている〔からな〕のです。

世界に水があると言うだけではありません、水の界域に世界があるのです。水の中がこのようにあるだけではありません、雲のなかにも^{こころあるもの}有情の世界があります、風のなかにも有情の世界があります、地のなかにも有情の世界があります、どの存在するものの界域にも有情の世界があります、ひと茎の草のなかにも有情の世界があります、一本の杖のなかにも有情の世界があります。有情の世界があるところにはかならず仏祖の世界があるのです。このような筋道を、よくよく（修行の場で）参^{まみ}えて学ばなければいけません。

ですから、水はまさに本ものの龍（仏として行為する修行者）の宮殿（力量を發揮する住まい）です、流れ落ちるのではないのです。流れるだけだと認めるなら、流れるという言葉は水を誘^{ほう}ることになります。たとえば流れでないとすることが無理強いになるからです。水は水のありのままの在り方（如是実相）をするだけです、水とは水の力量の發揮なのです、流れる〔だけ〕ではないのです。一つの水が流れることを（修行の場で）参^{まみ}えて究明し、〔また一つの水が〕流れないことを（修行の場で）参^{まみ}えて究明するまさにそのところに、〔現に〕存在する一切のものを究め尽くすことが実現するのです。

[3-3-C] 人（善会）が指導者（徳誠）に出会って道を得ることができるのは、その人が仏道修行する自分自身の行為においてすでに道を得ている人（徳誠）であ

るからであり、指導者（徳誠）が人（善会）に道を得させることができるのは、仏道修行する行為においてすでに道を得ている人（善会すなわち徳誠自身）に出会っているからである。仏道修行者が得る（釣る）道は、仏道修行するその行為と一つの出来事であり、道を得る（釣る）仏道修行者は、仏道修行する自分自身に出会っているのである。その意味で、人を釣る（道を得させる）ことは、自らを釣ることであり、人に釣られる（道を得る）ことは、自らに釣られることだ、と言うのだろう。

地水火風空等々、行為するものから独立に実体的に存在すると思われているものも、行為においてそれと一つのこととして生起する出来事にほかならないとすれば、その出来事のうちのそれと一つのこととして行為するものの世界が含まれていることになるだろう。それが仏道修行するもの（有情）の世界であるなら、そのことと一つの出来事として仏祖の世界が実現してはらずである、それが道理である、と言うのだろうか。

一般に、行為において生起している出来事を、行為するものがそのなかに住み込んでいる世界（水）としてそれが確固たる実在性を持つかぎり「流れない」と言い、その行為においてのみ実現する出来事（水）として生起するかぎり「流れる」と言えるなら、その一例として、仏道修行する行為（水）が「流れる」と言われ、仏であることを実証する出来事（水）が「流れない」と言われることも不思議ではないだろう。

*

[3-4-A] 山も宝にかくるる山あり、沢にかくるる山あり、空にかくるる山あり、山にかくるる山あり。蔵に蔵山する参学あり。

古仏云、「山是山、水是水」。

この道取は、やまこれやまといふにあらず、山これやまといふなり。しかあれば、やまを参究すべし、山を参窮すれば山に功夫なり。

かくのごとくの山水、おのづから賢をなし、聖をなすなり。

正法眼蔵山水経第二十九

爾時仁治元年庚子十月十八日于時在観音導利 興聖宝林寺示衆

[3-4-B] 山にも〔須弥山のように〕宝に蔵れる山があります、〔莊子〕に言う 沢に蔵れる山があります、空に蔵れる山があります、山に蔵れる山があります。蔵れることのうちに山が蔵れることを（修行の場で）参えて学ぶことがあります。

古仏は、「山はこれ山、水はこれ水」と言われました。

この言葉は、[ただ]「やまはやまである」と言っているのではなく、「(蔵に蔵山する) 山がやまである」と言っているのです。ですから、(蔵に蔵山する) やまを(修行の場で) 参えて究明しなければいけません、山を(修行の場で) 参えて究明するのなら、山において(修行の場で) 参えて力を尽くすのです。

このような山や水が、おのづから賢人をなし、聖人をなすのです。

『正法眼蔵』、第二十九卷、「山水経」

時に、仁治元年、庚子、十月十八日、観音導利興聖宝林寺において、修行者たちに示した。

[3-4-C] ふつうは、蔵すものと蔵されるものは「別のもの」である。そのとき、蔵すものも、蔵されるものも、それ自身と「同一なもの」と考えられ、その意味で、「やまはやま[自身と同一]」であると言われる。しかし、別のものが別のものを蔵すかぎり、その蔵すことは、かならずや、蔵し過ぎるか、蔵し足りないかだろう。

他方、蔵すものと蔵されるものが、互いを蔵しきり、互いのうちに蔵れきる(山が山に蔵れる)という仕方、自分自身の力量を発揮する(蔵に蔵山する)[蔵れることにおいて蔵れる山自身が実現する]ことができるのであれば、それは、蔵すものと蔵されるものが、「それ自身と同一な実体的なもの」(やま)などではなく、「それ自身と差異する同じ一つの出来事」(山)の「互いに差異する独自の生起の仕方」でありうるからだろう。

そのかぎり、行為するもの(山)は、その行為と一つのこととして生起する出来事(山)のうちに蔵れきり、この行為において生起する出来事(山)は、それと一つの出来事として生起する行為するもの(山)うちに蔵れきる。道元において、とりわけ、仏道修行する行為(山)と、「仏であることを実証する出来事(山)に関して、「山はこれ山」(山は山に蔵れる)と言われることも、この一般的な出来事(たとえ特権的であっても)(あるいは、道元では、唯一かも知れないが)一事例であると考えられる。

「蔵」は、「隠す」、「見えなくする」だけでなく、「おさめ入れる」、「たくわえる」、「内蔵する」を意味するのだろう。

注・参考文献

1) 矢島忠夫、正法眼蔵『仏性』(上)、弘前大学教育学部

紀要101、2009

- 2) テキストは、道元『正法眼蔵』第二卷、水野弥穂子校注、岩波文庫、1990.（「ふりがな」は新仮名遣いにあらため、また、煩瑣にならないように努めた。）
- 3) 現代文は、①道元禅師全集第三卷、『正法眼蔵』3、水野弥穂子訳注、春秋社、2006、②『正法眼蔵を讀む』4、春日佑芳訳注、ペリカン社、2000、③道元『正法眼蔵』第2卷、増谷文雄訳注、講談社学術文庫、2004を適宜参照した。
- 4) 仏教用語は、中村元『広説佛教語大辞典』、東京書房2002を参照した。

(2010. 1.19受理)